

【研究ノート】

東八拳に関する一考察

川上 香*

目次

- | | |
|------------|---------------|
| 1. はじめに | (2) 家元と派 |
| 2. 東八拳の歴史 | (3) 拳会 |
| (1) 東八拳の名前 | (4) 星取りと番付 |
| (2) 拳の流行 | 4. 大正から昭和の東八拳 |
| 3. 東八拳の概要 | 5. おわりに |
| (1) 勝負と手 | |

キーワード 東八拳 庄屋拳 狐拳 拳会 拳会角力図会
幫間 桜川善平 拳相撲 植木屋



写真1 庄屋拳

東八拳のもととなっている拳。庄屋拳、狐拳とも呼ばれる。

1. はじめに

とうはちけん
東八拳とは、庄屋・鉄砲・狐の3種類の手でたかう拳のことである。じゃん拳のように三すくみで、庄屋は鉄砲に勝ち、鉄砲は狐に勝ち、狐は庄屋に勝つ。その手の名前から「庄屋拳」とか「狐拳」とも呼ばれている。また、東八拳の発祥は、文政期にいた薬売りの売

* 当館学芸員

り声「藤八、五文、奇妙」を拳の掛け声にした説、吉原の幫間藤八が広めたという説、唐の国から伝わった説と、様ざまで藤八拳あるいは唐八拳、東八拳と書くことがある。しかし、拳の発生や伝播はさだかではない。ここでは江戸後期から現在までに限って、いくつかの文献や聞きとりから東八拳の歴史などを考察してみたいと思う。

2. 東八拳の歴史

(1) 東八拳の名前

『拳会角力図会』（当館蔵）は、文化6年（1809）浪波の義浪によって記された。義浪は拳の名人でもあったらしい。本書は、長崎に伝わった本拳を紹介し、その拳会の様子や拳を打つ方法、本拳以外の拳の紹介などをまとめた版本である。本拳は、片手で打つ拳で、1から6までを指で表し、相手との合計数を掛け声であてる拳である。本拳の拳会は、行事の挨拶ではじまり、力士に見立てた拳士が土俵で拳を競うのである。東八拳も、本拳の拳会の様式を取り入れている。東八拳はこのなかで、虎拳など様ざまな拳の一つとして、庄屋拳の名前で次のように紹介されている。

庄屋拳

庄やどのは鐵ほうに勝ち、鐵ほうはきつねにかち、狐はまた庄やに勝也、いづれも一二三の拍子にて図のごとくすなり、

ここではまだ東八拳の名は無く、掛け声も一二三の拍子で打つということになっている。通説では庄屋拳が江戸で藤八拳（東八拳）と呼ばれるようになったのは、文政8年中村座の『東

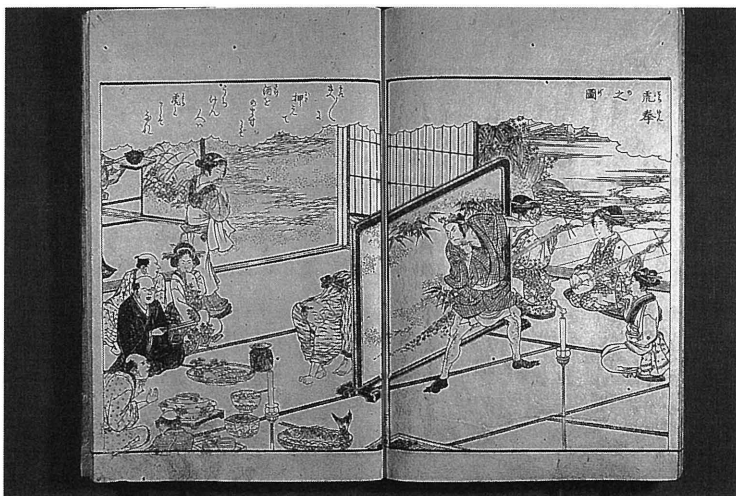


写真2 虎拳

虎と和藤内、母親を拳の手にして行われる拳。歌舞伎の「国性爺合戦」から題材をとったもの。屏風からそれぞれが同時にでて勝敗をきめる。三味線などがはいたもので、近年までお座敷あそびとしても行われていた。

海道四谷怪談』で松本幸四郎が、大当たりをとった、薬売りの売り声からといわれる。文政8年の流行として、石塚豊芥子の『巷街贅説』に藤八が「藤八、五文、奇妙」と言って一粒五文の丸薬を売り歩いたことが出ている。流行が歌舞伎のせりふで更に定着し、拳の掛け声となったものであろう。現在の東八拳の掛け声「タチ、ニノ、シメ」

の「タチ」は藤八がつまったものと言われている。藤八拳・庄屋拳・狐拳の名前は、それぞれに残っていった。

(2) 拳の流行

後掲の年表にあげたように、享保の頃『近世奇跡考』に、拳が江戸に流行り吉原の遊女玉菊が拳錦を使って上手に拳を打ったことが記されている。その頃から、拳は江戸でも行われていたらしい。主に酒席で行われることが多かったため、拳を打つまでの前部分の振りとその唄が、酒席の趣向を盛り上げられるかどうか流行の決め手となっていた。その例として『巷街贅説』に、弘化4年河原崎座で行われた『笑門 俄七福』^{わらうかどにわかやしちふく}の所作についての一文がある。

ことし未の春より流行するとて、つる拳じゃんじゃかぶし、へ酒は拳ざけいろしなは、へ蛙一トひよこ三ひよこひよこ、へ蛇ぬらぬらなめくで参りましよへすちやらかちゃん、ソレへじゃんじゃらじゃんじゃらじゃん拳な、へ婆様に和藤内がしかられた。へ虎がはうはうへとてつるてんへ狐でサアきなせ、へまいりましよへチョチョンガよんやき、此戯れ拳は、猿若町3丁目なる河原崎権之助が芝居にて、三代目中村歌右衛門六代目松本幸四郎、市川九蔵にて、舞臺にて致せし由、一枚絵にも摺出し、追々に替歌出来て、専らの流行とはなりぬ

このような様ざまな拳の唄の存在は、拳の勝ち負けを競うというよりは、唄にあわせた所作を酒席で披露することに重きがおかれたことを示しているのではないか。

この後、様ざまな拳の唄ができ、実際に拳に使うための振りの絵がはいったものや、世間の流行している三つの事柄や事象などを拳の三すくみに見立てた刷り物が、幕末から明治まで数多く刷られた。

3. 東八拳の概要

明治から現在までの東八拳の概要を簡単にまとめる。

(1) 勝負と手

東八拳は三すくみの拳である。拳の種類は狐・鉄砲・庄屋（旦那ともいう）である。狐は庄屋をばかして勝つが鉄砲には撃たれて負ける。鉄砲は狐に勝つが庄屋には負け、庄屋は鉄砲に勝つが狐にはだまされて負ける。

この三つの手を使って二人が正座して向かい合い先ず、「ヨイヨイヨイ」といいながら手を3回あわせるようにして「ハッ」で相拳である狐を出しては始める。勝負は土俵の上で行い、3回連続して勝つと行事が土俵上の算木を1本渡す。先に3本の算木を取ったほうが勝ちとなる。拳を打つ拳士は、3回連続して勝つとき、「イチ、ニノ、シメ」とか「タチ、ニノ、サン」などと言って手を1回たたき、その場をしめ、行司にアピールしないと勝ちにはならない。

表1 東八拳 派の人数の推移

拳名	昭和16(1941)	昭和34(1959)	昭和46(1971)	昭和52(1977)	平成元(1989)
花廻家	4	33	16	16	0
花乃家	0	2	1	4	0
花 柳	1	3	2	2	0
東川舎	18	17	7	18	4
東水舎	4	13	7	5	2
東開舎	0	1	0	0	0
龍魁舎	2	6	13	6	3
龍 王	0	(竜王1含) 3	5	6	2
拳闘会	7	8	10	4	4
藤花連	1	4	1	2	0
東家	9	4	3	3	14
菊廻家	1	3	0	0	0
旭明舎	1	1	0	0	0
忍 連	1	2	3	2	1
隅田川	3	3	1	0	0
東拳舎	1	2	0	0	0
竹信舎	0	2	1	0	0
群笑舎	0	1	0	0	0
吾妻家	1	1	4	2	0
拳友舎	0	4	0	0	0
旭 連	0	1	0	1	1
明友舎	2	3	2	0	0
昭旭舎	2	2	3	3	1
紅葉家	0	1	1	1	0
隅の家	0	0	0	0	0
花舎家	0	0	0	0	0
菅 原	0	0	0	0	0
桃雲舎	0	0	0	0	0
扇要舎	8	0	0	0	0
藤楽舎	0	0	11	0	0
中 王	0	0	3	2	7
竹の家	0	0	5	0	0
さくら会	0	0	1	1	0*
菊寿連	0	0	1	1	0
草加連	0	0	0	3	1
東旭舎	0	0	0	1	0
松廻家	0	0	0	15	0
花の家	1	0	0	0	0
藤龍舎	0	0	0	0	2

*さくら会は独自の拳会をもつので表には正しく反映されていない。(東八拳技睦会名簿より作成)

それぞれの手は、その一つが様ざまに変化する。例えば狐は目の高さに掌を相手にむけて八の字をつくるようにして出すのが基本だが、鉄砲から狐に変えるときは片手でもよいし、位置が揃わなくとも狐となるのである。同じことが他の手にも言えるので、初心者がちょっと見ただけでは何を出したのかわからない事が多い。拳を打つ速さは基本である正拳を打つのに1分間に約60から70を打つ速さといわれる。

(2) 家元と派

東八拳は、三種の手で行う単純な拳相撲であるが、その形や勝敗の決め手など奥が深く、その習熟には練習が必要である。東八拳を本格的に練習しようとする人は、まず師匠を決め弟子入りをする。師匠は、弟子に拳名をつけてやり、稽古をつける。現存の派では、その派の家元がすべての弟子の師匠となっている場合が多いが、派にたくさんの弟子がいる場合師匠の上に家元あるいは総家があり、派をまとめるかたちをとる。表1は、昭和16年からの東八拳技陸会名簿から、派と数をひろいだしたものである。ここからかなりの派があったことがわかる。昭和初期までは陸会に出席できるのはかなりの上級者であったので、名簿に登録されていない弟子は、会員数の数倍であったと思われる。近年、著しく東八拳をたしなむ全体数が減少していることもあって、家元を継げない派は消滅してしまったため、現在では数派しか残っていない。

五代目家元、旭連貴翁さん（大正元年生）によれば、入門縁組には、家元と師匠、総家（家元を引退、または現家元の師匠）と大格おおがくと呼ばれる拳士の上級者が出席した。そして新弟子は、塩を少々入れた酒を飲み、尾頭つきの魚を骨も残さず食べた後、家元からの盃をうけるしきたりであった。その盃の後、打ち込みといって勝敗をつけずに拳を打つ式を大格が行い、入門式としたという。

家元は、派の中での推薦があったり、家元自身から譲られたりして継ぐケースが多い。現在、派から独立して新しく一派をたて、その家元になる場合、日本東八拳技陸会の会則によって、前家元の承認を得て陸会に届け陸会の役員会で技術と品格を再調査し優秀と認められた場合に限り、陸会より家元承認状を授与される。

表2の家元の流れをみると、家元を許される人が職人に多いことがわかる。

(3) 拳会

拳会は各派師匠の元で練習をしてきた人びとが他の派の人と交流試合を行う場である。大正6年に日本東八拳技陸会ができるまでは、各派主催の拳会が開かれていた。拳会では、勝敗により点数がつけられる星取りを行う。年に一度の番付披露会でその点数の高低により相撲の番付上で拳士に役がつけられる。陸会ができてからも各派主催の拳会が行われたが、派で行う星取り会をもとに作られた番付を内輪番付といい、陸会で作る番付とは区別していたようである。番付披露会では役のついた拳士が試合を行う。昭和30年頃までは、番付披露会は夏に行われる

表2 家元の系譜 その1

<p>●拳闘舎 初代</p> <p>2代目</p> <p>3代目</p> <p>4代目</p>	<p>けんとうしゃとうらく 拳闘舎闘楽</p> <p>—</p> <p>拳闘舎闘楽</p> <p>—</p> <p>拳闘舎闘楽</p> <p>〈しばらく家元なし〉</p> <p>拳闘舎闘楽</p>	<p>1909年（明治42）浅草七軒町発祥。</p> <p>浅草で染物屋を営んでいた。</p> <p>常磐津小金太夫氏、現在86歳。60歳くらいのとき4代目家元 を3代目家元の後見人だった、拳闘舎闘旭よりもらう。拳闘 舎闘旭は、浅草で銅壺屋を営んでいた人。</p> <p>4代目 拳闘舎闘楽さんの拳歴。 7歳 2代目拳闘舎闘鶴<small>とうかく</small>の門弟となる。鶴<small>かく</small>太郎。 21歳 龍鳥と名を改める。 30歳 闘鶴（3代目）を継ぐ。</p>
<p>●東家 初代</p> <p>2代目</p> <p>3代目</p>	<p>あづまやしらく 東家司楽</p> <p>—</p> <p>東家司楽</p> <p>東家司楽</p>	<p>山下金次郎氏。自転車屋さんだった。向島に吾妻家という大 きな派があり、紋を決めるのに内輪もめがあり分裂。浪花節 の東家楽遊という有名人が分裂した側にいたので、東家にし た。</p> <p>大塚浩一氏。現在、自宅で拳の指南をしている。</p>
<p>●旭家 3代目</p> <p>4代目</p> <p>5代目</p>	<p>あさひれんきおう 旭連鬼翁</p> <p>旭連鬼翁</p> <p>旭連貴翁</p>	<p>新宿十二社のそばにあった、琴富喜という料亭の主人の弟。</p> <p>中谷三郎氏。大正元年生まれ。5、6年前に家元を継ぐ。大 正13年に入門した。昭和6年に植木屋の拳会で西の前頭筆頭 になり、代表で旗をうけとる。</p>
<p>●龍魁舎 2代目</p> <p>2代目</p>	<p>りゅうがいしゃりゅうさい 龍魁舎龍斎</p> <p>龍魁舎龍斎</p>	<p>看板屋さん。</p> <p>福原靖雄氏。戦後、近所の龍魁舎龍剣に拳をならう。</p>

東八拳に関する一考察

表2 家元の系譜 その2

<p>●龍王 2代目 3代目</p>	<p>りゅうおうきおう 龍王鬼翁 きみ 龍王鬼美</p>	<p>曾根川伝吉氏。銀座でおもに花柳界・芸能界の人の髪を結う床屋を営む。 曾根川こま氏、先代家元の長女。小唄曾根川派家元。東家寿楽につけられ、7～8歳で大関となる。 平成7年2月の初会（うちぞめ）で鬼翁を継ぐ。</p>
<p>●藤龍舎 初代</p>	<p>とうりゅうしゃけんおう 藤龍舎拳翁</p>	<p>榎本吾一郎氏。平成元年に龍王からでて、藤龍舎をつくる。師匠は龍王拳翁で拳翁の名前をもらう。</p>

表3 星取勝点表

出	星		1.5		
ストレート勝	○	○	7		
ストレート負	●	●	0		
勝 負 勝	○	●	○	5	
勝 負 負	○	●	●	2	
勝	分	○	分	4	
勝 負	分	○	●	分	3
負	分	●	分	1	
	分		分	2	
不 戦 勝				4	

『日本東八拳技睦会々則』より

ことが多く、他の派主催の会も夏であったのでかけもちに忙しかった（旭連貴翁さん）という。拳士は師匠の家等で日頃から練習をし、拳会で星取りを行い、番付披露会にそなえるのであった。昭和16年頃までは睦会の本部を東京の蔵前にある植木屋という貸席に置いていた。昭和初期には大勢の拳士がいたために、その植木屋と日本橋の浜町三丁目にあった浜三クラブという貸席で毎月1日と15日に星取り会が盛大に行われていたそうである。しかし、戦争の影響で若い拳士が減り、蔵前の植木屋で合同に行われるようになった。

(4) 星取りと番付

平成6年9月睦会発行の『日本東八拳技睦会会則』の星取勝点表による点数は別表の通りである。出星というのは参加点、分は勝負がつかず行事が「預かり」と言って引き分けにすることを言う。

番付はこの星取勝点表の点数を1年間合計して点数の多い者から順に三役にしていく。東の大関が最高位で以下、西の大関、東の小結というように役がつく。また現在の睦会では、年明けの初会で番付披露会をおこなうので、前年の最後の役員会が番付編成会議となり、点数が同点だったり前年の成績などを考慮し、番付が作られていく。東の大関を3回続けたものは横綱となり引退して年寄などになる。行司、検査役は家元レベルの人が務めることが多い。まだ役がつかない拳士は溜席ためせきにとどまる。客席は文字どおり後援者が名を連ねる。

拳の番付は江戸後期からつくられていた。当館所蔵の天保2年の番付には中央に拳相撲とありその下に、行司、世話役、勧進元となっており現在とさほど変わらない。大きくちがうのは拳士が多数おり、役の下には拳士が番付一杯に名をつらね、客席などが無い点である。

4. 大正から昭和の東八拳

大正、昭和初期（戦前）の東八拳は、どのようなものであったのか。日本東八拳技睦会の会員の方の聞き取りをまとめてみた。

ア. 旭連貴翁あきひれん きおうさん（大正元年生・男性）

大正13年、十二社（新宿）のそばに住む豊屋さんの東旭舎夢蔵という師匠が近所の友達数人集めて拳をはじめた。ここで手ほどきをうけた。のちに三代目旭連鬼翁師匠の門下となり、旭連旭丸と命名された。稽古場は師匠の兄が十二社の料亭、琴富喜亭の主人であったので、離れの座敷の六畳と四畳半を無料で貸してくれた。毎晩稽古にかよった。行儀作法もきびしく、夜の7時頃より10時頃まで正座で、足を崩せなかった。総家の東旭舎夢師匠は（稽古をつけてもらっていた。）厳しく、また、拳も見事で迫力があつた。

日本東八拳技睦会は浅草蔵前の植木屋という大きな貸席に本部があり毎月1日と15日に星取

りの会があり結果の番付ができる。そのころは、2年に3回番付ができた。会費は家元が50銭、大格が30銭、小格^{こがく}20銭だった。番付披露会には近県からも師匠や拳士が集まり、500人くらいになった。100畳くらいの広間があってそこで拳を打ったが体がくっついてしまうほど大勢いた。そのため役

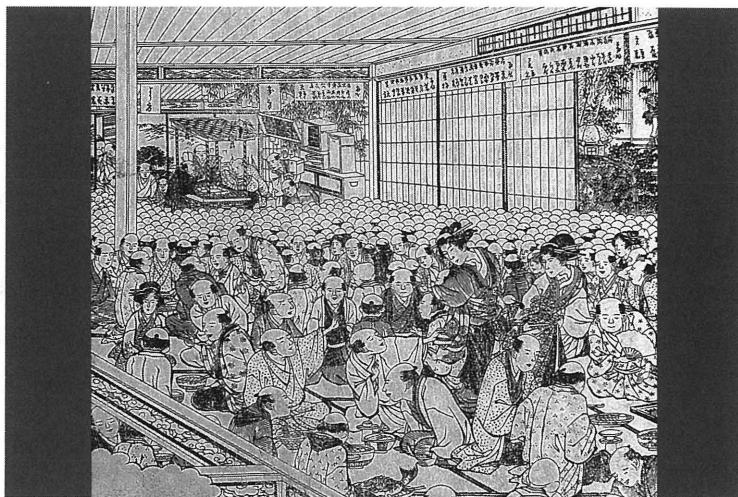


写真3 拳会の図

「拳会相撲図会」より。料理屋で拳会を行っている様子。大勢の人が集まり料理と酒を楽しみながら、拳相撲を見守っている。奥に土俵と打子、行司などが見える。鴨居には拳の名（しこ名のようなもの）が貼りだされている。現在の拳会でも拳の名の貼りだしが行われる。

のつく前頭になるまでが大変だった。昭和5年、家元が他に移り稽古が休

みになった。稽古不足で星取りがうまくいかなかった。夏は外の縁台で拳を打っているところが多かったので千駄ヶ谷の旭明舎や、初台の東旭舎にいて拳を打ち、柏木（現新宿区）の東川舎に出稽古にいった。昭和5年、日本拳技陸会番付の西前頭筆頭で旗をうけとれたが、それからが大変で三役を目指して稽古に力を入れねばならなかった。旭連では、正拳（基本となる拳、形が明確。）に一本間（正拳よりやや遅めで一本の間をいれる。）の技をいれるが、他の派

では軟拳（非常に早い拳で、手の判断が困難である。）を打つ人が多く、なかなか勝てなかった。困って新富町の東川舎小鶴丸（現在の東翁斎さん。）に話したところ、出稽古を快諾してくれ、毎晩十二社から市電に乗って新富町に通った。市電のなかでも拳を打った。乗っている他の人も拳を知っているので怒ったりせず、勝つと手をたたいてくれ

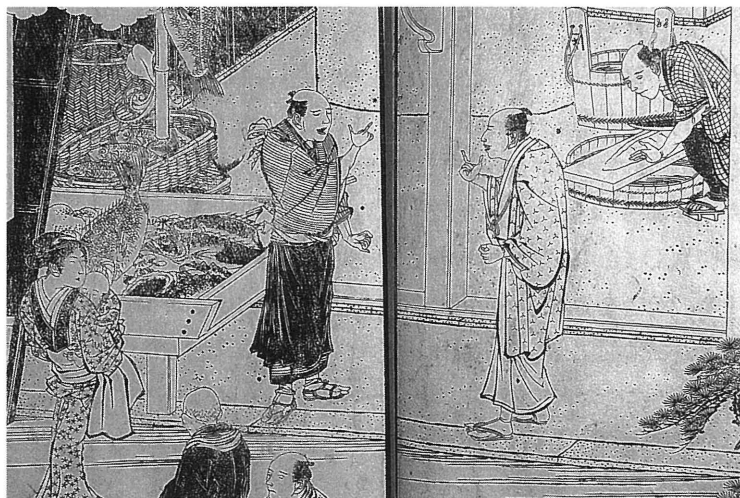


写真4 市中での拳

店先で拳を打つ人。拳はどこでも行われていた。図の拳は本拳（指の数の足し引きで勝敗を決める）だと思われる。

たりした。練習の末、軟拳（型がほとんどわからない程、速い拳。）も打てるようになり、星取りも有利に運び、昭和7年に西の関脇に昇進した。同年、家業の都合で本部の星取り会に出席できなくなったため、友達を誘い拳を教えることにした。店を閉め八時頃から十二社の座敷で行った。座敷の電気や水道代などの足しにしてもらうよう会費として、1カ月50銭を集めた。料亭のお得意さんなどあわせ総勢25名になった。師につかない一般の人はカフェなどで拳で賭をしている人もあったが、師についている人はそういうところで拳を打ってはいけないといわれていた。拳の練習は昭和15年まで続いた。戦争が激しくなり、昭和18年に招集された。（拳の稽古は中止。）軍隊でも拳を打った。終戦をむかえ沖縄本島の収容所に抑留されていた。点呼後は好きな事ができ、歌や読書、踊りなど様ざまであったが拳を打つ人も大勢いた。

東八拳は家の内でも外もでき、子供や大人、男でも女でもスカンピンでも出来るから良い。1回勝つと手拭い、3回勝つと草履やシャツを貰えた。あまり強いと賞品泥棒と言われてたりした。大正6年から昭和の5年くらいまでは、東八拳は最も盛んで、東京のどこへ行っても東八拳の稽古所があった。飛鳥山や小金井堤や十二社の桜山などで花見をするときも、たいてい東八拳のグループがいて土俵をおいて拳を打ち一般の人が飛び入りをしたりした。また、笠間稲荷の共栄講や、大山講でお参りにいく時も合間をみて東八拳を打ったし、町の鎮守様やお稲荷さんの初午のお祭りでも神輿を担ぐ合間に打ったり、仮舞台の上で芸人達がかっぱれ等を踊ったあと、やっぱり東八拳を打っていた。そのころは「東八拳を打てなけりゃ、町内をでかい顔して歩けねえ。」といったぐらいであった。（旭連貴翁さんが当時の様子をまとめてくださったメモを筆者がまとめたもの。カッコ内は筆者注）

イ、^{けんとうしゃとうらく}拳闘舎闘楽さん（明治41年生・男性）

拳の会場、^{かいば}蔵前の植木屋は平屋建てで、江戸時代からあった貸席だと聞いている。歌舞伎座で助六をやるときは、吉原から引き幕をお祝いに送ったが、その引き幕を運ぶ行列が疲れると蔵前の植木屋で一度休み、手をしめてからまた出発したと善平さんのお父さんから聞いたことがある（東翁齋さんこと桜川善平さんの父）。植木屋では食べ物仕出屋で取っていた。広間に竹の仕切りがあり、大格は寿司を食べていたが、小格は食べられなかった。強い人にはおそれ多くて近寄れなかった。真剣勝負だったので、土俵の検査役や行司のきり方（勝敗のつけかた）が悪いと、あとで待ち伏せをして喧嘩をした。いろいろな派が集まるので、細かい部分がなかなか合わない。職人が多かった。前の龍王鬼翁さんは床屋さんで、顔をあたるのが上手く、やってもらうと、白粉ののりがちがうといわれた名人だった。芸者や役者がかよっていた。

拳闘舎の前の家元の家には「拳指南所」と看板が出ていた。弟子に名前をつけるときは自分の名前と師匠の名前からもらってつける。もう使わない名前を止め名という。

ウ、^{ちゅうおうはるやま}中王春山さん（大正10年生・女性）

女は勝負にこだわらず、きれいに拳を打てと姉にいわれた。姉は昭和5、6年頃、船橋で芸者をしていた。女は軟拳をおそわらなくていいと言って、拳も「いち、にの、さん」で打ったので、睦会でやっている「たち、にの、しめ」という掛け声はなじめなかった。一般の人が拳を覚えるのには、兵隊にいつて覚えるか、お座敷で覚えるかだった。兵隊にいつて覚えた人には遊びがないので、きちっとやる拳を兵隊拳といつた。太鼓を真ん中において、負けると太鼓をててんと打って、太鼓の周りをまわった。ほかにも拳の種類はあつたと思う。

^{あづまおうさい}
エ. 東翁齋さん (大正元年生・男性)

東翁齋さんは幫間の桜川善平氏。大正元年、中央区新富町に生まれ、昭和16年まで新富町に住むが、もらい火で家を消失。渋谷に移るもすぐ出征。昭和24年復員。現在は新宿区高田馬場に住む。

東八拳との出会いは大正8年の時で、そのころ新富町に住んでいた拳の師匠、藤花連小花又^{また}に教わつた。翁齋さんは藤花連小窓丸として東八拳を打ちはじめ。関東大震災のあと、大正12年12月に日比谷公園の床屋で髪を切ってもらつたところ、その店主に「坊や、拳教えたげるよ。」といわれ、店主と手合わせしたところ、翁齋さんのほうが強く、店主に銀座2丁目で、たばこと草履屋を営んでいた東川舎鶴翁師匠に引き合わされる。翁齋さんは、その師匠に見込まれ、「育ててみたいから」といつて、東川舎鶴翁が翁齋さんを藤花連小花又から弟子にもらい受ける。お金はとらず、逆に付け届けやセルの着物などをくれたという。父親から、銀座の師匠を大切にするようにいわれた。

翁齋さんが、東八拳の横綱になつたのは、昭和6年、20歳の時であつた。そのころは兵隊検査(21歳)の前は、横綱にしないという東八拳の内部の決まりがあつたが、翁齋さんが強くて賞品をとつていつてしまふことから、早く横綱にしてしまふと20歳で横綱になつた。東八拳の大会では出席をすると1点、勝つと1点、3人続けて勝つと優待で手拭いがもらえる。職人が多かつたのでその手拭いをあつめて浴衣につくる人がいた。桜川さんもやつてみたかつたが、父親に出世前の人間がやるもんぢやない



写真5 平成7年東八拳初会の様子 吉原松葉屋にて

と止められた。

番付によく登場する植木屋は、蔵前にあった貸席で、小柄で色白のおかみさんに翁齋さんは可愛がられ、よくお菓子をもらった。大正13年から通っていたが、昭和9年頃になくなった。

東八拳も昭和10年頃には自然消滅してしまった。拳の師匠が亡くなり、あとを継ぐものがないとその派はなくなってしまうことが多い。そのような時に当時の清水組に勤めていた、久保田孫一という人が翁齋さんの師匠東川舎鶴翁を訪ね、拳のお手合わせをしたいとやってきた。師匠は翁齋さんを紹介したため、久保田氏は、砂糖を2斤ばかりもち、翁齋さんを訪ねてきた。正月で翁齋さんも仕事が忙しく、相手をできなかったため、一度帰ってもらった。しばらくして、新橋のながたという料亭から声がかかり翁齋さんがでかけると、部屋の両側に20人ほど芸者が居て、その正面に久保田氏が座って待っていた。そこで、久保田氏から、もう一度拳を復興したいと相談をうけ(翁齋さんが)、当時残っていた各派の家元のところをまわって、復興に尽力した。

久保田氏から、この時節は芸者に拳を教えなければといわれ、九段(富士見町)と神楽坂の芸者にただで教えたりした。昭和14年頃拳は復興し、昭和16年の3月5日には銀座の松阪屋6階で「銃後健全拳大会」を開いた。(翁齋さんと久保田氏で)共著で本を出そうとしていたが、翁齋さんが出征したため久保田氏がひとりで出してしまった本が昭和16年7月20日発行『健全娯楽東八拳道』である。久保田氏は東拳舎天堂と名乗っていた。昭和17年9月15日に第1回大日本東八拳道会が開かれた。その番付には(翁齋さんは)大関で出征中となって欄外にのっている。昭和18年久保田氏が死去。戦争中拳は途絶える。戦後、徒二クラブや大塚のてんそう神社の社務所などでおこなっていたが、昭和26年頃当時の東家司楽さんが1万円出して番付をつくり新富町の見番で第1回日本東八拳技陸会が行われた(戦後1回目)。拳をたしなむ人は減ってきているものの、現在でも年1回は番付をだし、毎月星取りをやっている。

(翁齋さんは)今年師匠の東川舎鶴翁の隠居名である東翁齋の名前を襲名した。

拳のお囃子はその当時の流行をとりいれることが多く、記憶しているのは初代の東翁齋がつくったもので、「日本勝ったか大勝利、ロシア兵負けたか失敗だ。ポンポコポンポコポンポコポンポコスッチャンチャンシキチャンシキシキピーピーピーヒャラピーヒャララ」よよいのよいで、拳を打つ。

おわりに

平成7年2月5日、日本東八拳技陸会の初会が、吉原の松葉屋で行われた。打ち込み、番付披露など華やかにもようされ、約50人の人々が東八拳を楽しんだ。

残念なことは、会長の東翁齋さんが急逝され、この会に出席できなかったことである。東八拳の第一人者であり、また、幫間としても活躍されていただけに惜まれてならない。「東八拳

東八拳に関する一考察

ってなに？」というレベルの筆者に対しても、正面からお付き合いくださり、おそれ入るばかりであった。東八拳の普及に尽力されており東八拳の名が広まるならと、拙ない調査にも大変ご協力いただいた。あの切れのいい拳や江戸弁がもう聞けないのかと思うと悲しくてならない。心からご冥福をお祈りする。

末筆ながら日本東八拳技睦会の皆様、東八拳さくら会の皆様に厚くお礼申し上げます。

[参考文献]

- ・久保田孫一『健全娯楽東八拳道』精神科学出版社（東翁齋氏がかなりの部分を担当されたという。）、1941年。
- ・浪波義浪『拳会相撲図会』1809年（文化6）。
- ・『巷街贅説』卷之二、卷之五（『続日本随筆大成』別巻 近世風俗見聞集9ならびに10、吉川弘文館、1983年。
- ・『豊芥子日記』卷之上（『続日本随筆大成』別巻 近世風俗見聞集10、吉川弘文館、1983年。
- ・神宮司庁編『古事類宛』遊戯部、吉川弘文館、1979年。
- ・伊原敏郎著、河竹繁俊、吉田暎二編集校訂『歌舞伎年表』第1巻～8巻、岩波書店。
- ・「東八拳会員名簿」日本東八拳技睦会発行。
- ・「日本東八拳技睦会会則」日本東八拳技睦会発行。

近世 東八拳年表

年 代	主 な 事 柄
	<p>『近世奇跡考』に、享保年間に吉原の遊女玉菊が拳まわしを付け拳を打っていた記述あり。</p> <p>『倭訓栞』、『芝居随筆』、『嬉遊笑覧』に拳についての記述あり。(拳は唐国の拇陣のことで、子供の打つ虫拳がそのなごりをとどめている等。)</p>
文化6年(1809)	『拳会角力図会』刊。本拳が長崎、大坂、京都で行われる。
文化10年(1813)	『豊芥子日記』に、「この頃の流行にて、酒席に三人寄りて、猫と雉子と狐の鳴きくらべ、アレきかさんせ さんせ さんせ—中略—是酒興にて一座打寄り、同音にはやし戯れ笑ひしもの、酒をとふべる事、拳と同然なり」とあり。
文政8年(1825)	<p>『巷街贅説』文政8年の流行編に「藤八五文尤奇妙 藤八五文奇妙といいて、丸葉を売りありく、藤八と云る者の製葉のよし、一粒五文なり」とあり。</p> <p>同年7月26日より中村座「東海道四谷怪談」上演。松本幸四郎が藤八五文の葉売りの声をつかって大あたりをとる。</p>
文政12年(1829)	『拳独稽古』刊。拳稽古所などが文化文政期にできたとみられる。
天保15年(1844)	『天保度御改正諸事止』に市中の拳稽古所を差し止めの記事あり。
弘化4年(1847)	<p>正月12日より河原崎座にて「笑門俄七福」上演。拳の所作が大評判となる。</p> <p>『巷街類説』弘化4年の流行として「ことし末の春より流行するとて、つる拳じゃんじゃがぶし、—中略—此戯れ拳は、猿若町三丁目なる河原崎権之助が芝居にて、三代目中村歌右衛門、六代目松本幸四郎、市川九蔵にて、舞臺にて致せし由、一枚絵にも摺出し、追々に替歌出来て、専らの流行とはなりぬ」とあり。</p>
嘉永2年(1849)	<p>『皇都午睡』に「近頃東都にてはやりしはジャン拳なり。—中略—これより色々の趣向をつけ、とどは三国拳とて天照大神孔子釈迦有りたれどはやらず。」とあり。</p> <p>拳の替え歌とその振りを描いたものや、当時の流行を拳の勝負に見立てて描いた1枚ものの摺物が多数出された。</p>

近代 東八拳年表

年 代	主 な 事 柄
明治	東八拳に派が多数できる。
大正 6 年 (1917)	日本拳技睦会ができる。
昭和初期	東八拳が下火となったため、神楽坂の芸者衆に桜川善平が拳を教えはじめる。
昭和16年 (1941)	2月2日、大日本東八拳道会できる。 3月16日、新体制下銃後健全慰楽大会が大阪松坂屋で開かれ、東京・大阪・京都の拳士が集まり拳を競う。
昭和17年 (1942)	大日本東八拳道会発足後初めての東八拳大会が蔵前の植木屋で開かれる。
昭和26年頃	東家司楽氏が一万円出資し、戦後第1回の東八拳番付披露会を新富町の見番で開く。
昭和35年 (1960)	8月23日、東八拳保存会(さくら会)ができ、浅草松屋ホールでお披露目。会長、東川舎伊の丸。 この間、日本拳技睦会と東八拳さくら会の2つが拳会などの活動を続ける。
平成元年 (1989)	10月29日 日本東八拳技睦会が19年ぶりに番付を披露する。
平成 6 年 (1994)	6月11日 日本東八拳技睦会会長の東川舎鶴丸(桜川善平)が東川舎派の三世、東 翁齋を襲名し、祝賀会が開かれる。